

【A年】聖霊降臨節第10主日(2021年7月25日)

【聖書朗読箇所】ペトロの手紙一 1章3～9節

³わたしたちの主イエス・キリストの父である神が、ほめたたえられますように。神は豊かな憐れみにより、わたしたちを新たに生まれさせ、死者の中からのイエス・キリストの復活によって、生き生きとした希望を与え、⁴また、あなたがたのために天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、しぼまない財産を受け継ぐ者としてくださいました。⁵あなたがたは、終わりの時に現されるように準備されている救いを受けるために、神の力により、信仰によって守られています。⁶それゆえ、あなたがたは、心から喜んでいるのです。今しばらくの間、いろいろな試練に悩まねばならないかもしれませんが、⁷あなたがたの信仰は、その試練によって本物と証明され、火で精錬されながらも朽ちるほかない金よりはるかに尊くて、イエス・キリストが現れるときには、称賛と光栄と誉れをもたりますのです。⁸あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ちあふれています。⁹それは、あなたがたが信仰の実りとして魂の救いを受けているからです。

【旧約聖書日課】ホセア書 6章1～6節

¹「さあ、我々は主のもとに帰ろう。
主は我々を引き裂かれたが、いやし
我々を打たれたが、傷を包んでくださる。」
²二日の後、主は我々を生かし
三日目に、立ち上がらせてくださる。
我々は御前に生きる。
³我々は主を知ろう。
主を知ることを追求めよう。
主は曙の光のように必ず現れ
降り注ぐ雨のように
大地を潤す春雨のように
我々を訪れてくださる。」

⁴ エフライムよ
わたしはお前をどうしたらよいか。
ユダよ、お前をどうしたらよいか。
お前たちの愛は朝の霧
すぐに消えうせる露のようだ。
⁵ それゆえ、わたしは彼らを
預言者たちによって切り倒し
わたしの口の言葉をもって滅ぼす。
わたしの行う裁きは光のように現れる。
⁶ わたしが喜ぶのは愛であっていけにえではなく
神を知ることであって
焼き尽くす献げ物ではない。

【使徒書日課】

コリントの信徒への手紙二 5章14節～6章2節

⁵ ¹⁴なぜなら、キリストの愛がわたしたちを駆り立てているからです。わたしたちはこう考えます。すなわち、一人の方がすべての人のために死んでくださった以上、すべての人も死んだことになり、¹⁵その一人の方はすべての人のために死んでくださった。その目的は、生きている人たちが、もはや自分自身のために生きるのではなく、自分たちのために死んで復活してくださった方のために生きることなのです。

¹⁶それで、わたしたちは、今後だれをも肉に従って知ろうとはしません。肉に従ってキリストを知っていたとしても、今はもうそのように知ろうとはしません。¹⁷だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。¹⁸これらはすべて神から出ることであって、神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました。¹⁹つまり、神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちにゆだねられたのです。

²⁰ですから、神がわたしたちを通して勧めておられるので、わたしたちはキリストの使者の務めを果たしています。キリストに代わってお願いします。神と和解させていただきなさい。²¹罪と何のかわかりもない方を、神はわたしたちのために罪となさいました。わたしたちはその方によって神の義を得ることができたのです。

6 ¹わたしたちはまた、神の協力者としてあなたがたに勧めます。神からいただいた恵みを無駄にしてはいけません。²なぜなら、「恵みの時に、わたしはあなたの願いを聞き入れた。救いの日に、わたしはあなたを助けた。」と神は言っておられるからです。今や、恵みの時、今こそ、救いの日。

【福音書日課】マタイによる福音書 9章9～13節

⁹ イエスはそこをたち、通りがかりに、マタイという人が収税所に座っているのを見かけて、「わたしに従いなさい」と言われた。彼は立ち上がってイエスに従った。¹⁰ イエスとその家で食事をしておられたときのことである。徴税人や罪人も大勢やって来て、イエスや弟子たちと同席していた。¹¹ フェリサイ派の人々はこれを見て、弟子たちに、「なぜ、あなたたちの先生は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と言った。¹² イエスはこれ聞いて言われた。「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。¹³ 『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

【聖書朗読箇所】ペトロの手紙一 1章3～9節

³私たちの主イエス・キリストの父なる神が、ほめたたえられますように。神は、豊かな憐れみにより、死者の中からのイエス・キリストの復活を通して、私たちを新たに生まれさせ、生ける希望を与えてくださいました。⁴また、あなたがたのために天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、消えることのないものを受け継ぐ者としてくださいました。⁵あなたがたは、終わりの時に現されるように準備されている救いを受けるために、神の力により、信仰によって守られています。⁶それゆえ、あなたがたは、大いに喜んでいます。今しばらくの間、さまざまな試練に悩まなければならないかもしれませんが、⁷あなたがたの信仰の試練は、火で精錬されながらも朽ちるほかに金よりはるかに尊く、イエス・キリストが現れるときに、称賛と栄光と誉れをもたらすのです。⁸あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛しており、今見えてはいないのに信じており、言葉に尽くせないすばらしい喜びに溢れています。⁹それは、あなたがたが信仰の目標である魂の救いを得ているからです。

ホセア書 6章1～6節

- 1 さあ、我々は主のもとに帰ろう。
主は我々を引き裂いたが、癒やし我々を打たれたが、包んでくださる。
- 2 主は二日の後に我々を生き返らせ三日目に起き上がらせてくださる。
我々は主の前に生きる。
- 3 我々は知ろう。
主を知ることが切に求めよう。
主は曙の光のように必ず現れ雨のように我々を訪れる。
地を潤す春の雨のように
- 4 エフライムよ、私はあなたに何をなすべきか。
ユダよ、あなたに何をなすべきか。
あなたがたの慈しみは朝の霧はかなく消える露のようだ。
- 5 それゆえ、私は預言者たちによって切り倒し私の口の言葉によって彼らを打ち倒す。
あなたの裁きは光のように現れる。
- 6 私が喜ぶのは慈しみであって
いけにえではなく
神を知ることであって
焼き尽くすいけにえではない。

コリントの信徒への手紙二 5章14節～6章2節

⁵¹⁴事実、キリストの愛が私たちを捕らえて離さないのです。私たちはこう考えました。すなわち、一人の方がすべての人のために死んでくださった以上、すべての人が死んだのです。¹⁵その方はすべての人のために死んでくださいました。生きている人々が、もはや自分たちのために生きるのではなく、自分たちのために死んで復活してくださった方のために生きるためです。

¹⁶それで、私たちは、今後誰をも肉に従って知ろうとはしません。かつては肉に従ってキリストを知っていたとしても、今はもうそのように知ろうとはしません。¹⁷だから、誰でもキリストにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去り、まさに新しいものが生じたのです。¹⁸これらはすべて神から出ています。神はキリストを通して私たちをご自分と和解させ、また、和解の務めを私たちに授けてくださいました。¹⁹つまり、神はキリストにあって世をご自分と和解させ、人々に罪の責任を問うことなく、和解の言葉を私たちに委ねられたのです。²⁰こういうわけで、神が私たちを通して勧めておられるので、私たちはキリストに代わって使者の務めを果たしています。キリストに代わってお願いします。神の和解を受け入れなさい。²¹神は、罪を知らない方を、私たちのために罪となさいました。私たちが、その方にあって神の義となるためです。

6¹私たちはまた、神と共に働く者として勧めます。神の恵みをいわずらに受けてはなりません。²なぜなら、
「私は恵みの時に、あなたに
救いの日に、あなたを助けた」
と神は言っておられるからです。今こそ、恵みの時、今こそ、救いの日です。

マタイによる福音書 9章9～13節

⁹イエスはそこから進んで行き、マタイと言う人が収税所に座っているのを見て、「私に従いなさい」と言われた。彼は立ち上がってイエスに従った。¹⁰イエスが家で食事の席に着いておられたときのことである。そこに、徴税人や罪人が大勢来て、イエスや弟子たちと同席していた。¹¹ファリサイ派の人々はこれを見て、弟子たちに、「なぜ、あなたがたの先生は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と言った。¹²イエスはこれを聞いて言われた。「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。¹³『私が求めるのは憐れみ(別訳→憐れみ)であって、いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい。私が来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・7月25日「聖霊降臨節第10主日」の日課主題は「憐れみの福音」。福音書日課は、「収税人マタイの召命」の箇所、召命に続く食事の席での出来事が描かれ、主イエスの宣教対象として「徴税人や罪人」が明示される。旧約日課は、福音書日課箇所、主イエスが引用されている「ホセア書」の預言を含む箇所。使徒書日課は、「コリントの信徒への手紙二」から、使徒パウロが「和解の福音」という理解を提示する箇所。

・当日の主日礼拝は、ゲスト説教者（阿佐ヶ谷教会・上田充香子伝道師）の指定する聖書箇所（ペトロの手紙一 1:3-9）を聖書朗読箇所とする。

聖書朗読箇所（Ⅰペトロ1章より）

・「ペトロの手紙一」は、使徒ペトロの名によって記された書簡で、おもに現在のトルコ中央部の地域に離散している諸教会に宛てたものとされている。現代の歴史批評主義に立つ新約学者の多くは、「手紙二」と共に本書簡を「ペトロの名を用いて他の弟子によって作成された偽書」とみなすが、そもそも書簡末尾（5:12）には本書簡がシルワノの代筆によって著されたものであることが明示されており、ペトロの真筆性は議論の対象となり得ない。重要な点は、本書簡で著者の述べる内容が、「マタイ」や「マルコ」の福音書伝承を踏まえていることであり、「主イエスの公生涯を共にしたペトロであれば当然、そのように語るだろう」と期待されうることが述べられているからこそ、初期教会で本書簡は「ペトロの手紙」として広く受け入れられたということである。

・日課箇所は、本書簡の冒頭序文で、挨拶（1:1-2）に続く箇所。本書簡で、著者ペトロは、キリスト信者がその信仰のゆえにキリストが受けられたような試練や苦難を避けることはできないこと、むしろキリストと同様の試練や苦難を引き受けることによって他の人々の救いのために用いられるようになる、という信仰観を一貫して示しているが、日課箇所にもすでに、そのような観点からの「試練」理解が反映されている。ペトロは、公生涯の証人として主イエスの試練や苦難を間近で目撃し、主の十字架と復活という経験を通して主の受けられた試練や苦難を自分自身の担うべき責務と理解した信仰者であった、ということが、この箇所での展開の背景とされている。その上で、ペトロは、すでに復活前の主イエスと直接会ったことのない人々が教会に加わり、信仰を学ぶという時代になっていることを踏まえて、たとえキリストと直接お会いしたことがなくても、神の恵みとしての「魂の救いを受けている」と示すことで、信仰至上主義ではない恩寵神学を基礎づけとして譲っていない。

・本書簡は、キリスト者とは何者かということを原理的に示す文書として、教会においては、しばしば、洗礼教育のための基礎資料とされてきた。

旧約日課（ホセア6章より）

・「ホセア書」は、ユダヤ正典「後の預言者」中「十二小預言者」の初めに置かれた預言書。紀元前8世紀後半の北王国滅亡の時代に北王国で預言活動を開始し、おそらく北王国滅亡後には南王国領域で活動していた「イザヤ」ら祭司・預言者の集団に合流し、「預言書」を残すことになった。「ホセア書」は、冒頭3章で預言者自身の破綻した家族関係を描き出すことによって、象徴的に神とイスラエルとの関係が破綻していること、また、にもかかわらず夫を裏切った妻を再び夫が受け入れるように、神が不貞のイスラエルを受け入れ、関係を回復されるだろうという、印象的な象徴的預言を告げている。これは、ホセアの夫婦関係が実際に破綻していたということを反映しているというわけではなく、一種の「たとえ話」と見るのが適当。

・日課箇所は、前半（1-3節）で神から離反していた人々の「悔い改めの言葉」が提示されるが、後半（4-6節）の言説から判断すると、この「悔い改めの言葉」は上っ面だけの偽りの悔い改めとして置かれているのだろう。とは言え、前半部の「悔い改めの言葉」だけを取り上げるならば、これが偽りの言葉であるということ直ちに断言できる内容とはなっていない。むしろ、神について救済の意図まですでに理解した、知性と謙遜を有した信仰者の言葉とさえ受け取ることができる。実際、前半部と後半部を逆転させるならば、「悔い改めの言葉」は、真っ当な悔い改めとして置かれていると解釈されう。しかし、本文通りの順序を前提に、前半の「悔い改めの言葉」の何が問題として考えられているのかを問う必要がある。おそらく、ここでは、「悔い改めの言葉」の内容が問題として考えられているのではなく、このような真っ当な「悔い改めの言葉」を口にすることができる人々が、にもかかわらずそれと相反する行動を起こすという、移ろいやすい存在であることが、問題として捉えられているのである。

使徒書日課（Ⅱコリント5-6章より）

・「コリントの信徒への手紙二」は、「手紙一」と共に、使徒パウロが自ら創建に携わったコリント教会に宛てて記し送った一連の書簡の一つ。コリント教会は、創設したパウロらが離れた後、ペトロやアポロなど当時の著名な宣教者らが訪れては短期間の指導を行い、それによって教勢が拡大したと考えられるが、それによって、党派主義的な混乱が生じていたと推察される。パウロは、教会創設の宣教者として離れた後にも連絡を取り合い書簡や人を派遣することで指導を続けようとしたが、他の指導者を慕うグループから「使徒」として指導する資格を問われるなどし、教会との関係修復が必要になっていた。「手紙二」は、破綻した関係を修復しようとする動きが双方で始まったことをうかがわせる内容で記され、日課箇所も、その神学的論拠として、「和解の福音」を提示しようとしている。

・6:2 聖句引用はイザヤ 49:8。

福音書日課(マタイ9章より)

・日課箇所は、十二弟子の一人で「収税人マタイ」の召命に関する逸話の箇所。共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)が共通して伝えているが、「マルコ」と「ルカ」はその名を「レビ」としている。日課箇所は、この「収税人(徴税人)マタイ」が弟子の一人として加えられたことと、そのマタイを筆頭とする「徴税人や罪人」が主イエスと食事を共にしていたことが続けて描かれており、主イエスの「徴税人や罪人」に対する積極的な姿勢(単に彼らを「仲間外れ」から解放したというだけでなく、ご自分の事業の中心で働く者として選ばれた!)が強調されている。

・「徴税人(収税人)」が「罪人」と同様にみなされていたのは、彼らがローマ帝国の徴税請負人であったからであり、ユダヤ人社会に対する裏切り者として疎外されていた。ユダヤ人は、自分たちの共同体社会を維持するための「神殿税」を制度化しており、それによっておもに神殿を中心とする社会制度が維持されていた。同時に、ローマ帝国支配下にあつて、総督や領主を通して課される「税」や「貢」があり、これを町場の民間請負人が徴収していたのが「収税所」である。「収税・徴税」の問題は、ユダヤ人社会ではしばしば論じられていたと考えられ、主イエスも「神殿税」(マタイ17:24以下)や「皇帝への税金」(同22:15以下)についての見解を求められたという逸話がある。それらによると、主イエスは、どちらについても納税を否定していない。このような立場は、初代教会でも同様だったと考えられ、パウロも「ローマ」13章で明示している。

来週の誕生日(7月25日～31日)

。

主日礼拝の讚美歌から

・21-14 番「たたえよ、王なるわれらの神を」は、19世紀以来イギリスの代表的な讚美歌の一つ。作詞のライトは英国教会司祭で 21-218 番「日暮れてやみはせまり」(I 39 番「日くれて四方はくらし」)も作詞。作曲のゴスは英セント・ポール大聖堂のオルガニストや王立音楽学校の教授を務めた教会音楽家。

・21-575 番「球根の中には」は、20世紀中盤の米国で合同メソジスト教会が成立した時期に夫の牧する教会で音楽奉仕者として活動した音楽家ナタリー・スリースの創作讚美歌。合同メソジスト教会の讚美歌集に収録され、好んで歌われてきている。

・21-481 番「救いの主イエスの」(I 259「あめなる主イエスの」)は、宗教改革前夜の15世紀後半のイタリアの修道士ジロラモ・サヴォナローラの作詞。彼は、当時のイタリアの社会や教会の腐敗を告発する活動を組織して異端審問の末に火刑に処せられたが、16世紀中葉に編纂されたイタリア語聖歌集に採用された。曲は、オランダ民謡の旋律に和声がつけられたもの。英語讚美歌では、他の歌詞に付される。

21-14「たたえよ、王なるわれらの神を」**Praise, My Soul, the King of Heaven**

1. Praise, my soul, the King of heaven, / to the throne thy tribute bring; / ransomed, healed, restored, forgiven, / evermore God's praises sing. / Alleluia! Alleluia! / Praise the everlasting King.
2. Praise the Lord for grace and favor / to all people in distress; / praise God, still the same as ever, / slow to chide, and swift to bless. / Alleluia! Alleluia! / Glorious now God's faithfulness.
3. Fatherlike, God tends and spares us; / well our feeble frame God knows; / motherlike, God gently bears us, / rescues us from all our foes. / Alleluia! Alleluia! / Widely yet God's mercy flows.
4. Angels in the heights, adoring, / you behold God face to face; / saints triumphant, now adoring, / gathered in from every race. / Alleluia! Alleluia! / Praise with us the God of grace.

21-575「球根の中には」**In the bulb there is a flower**

1. In the bulb there is a flower; / in the seed, an apple tree; / in cocoons, a hidden promise: / butterflies will soon be free! / In the cold and snow of winter / there's a spring that waits to be, / unrevealed until its season, / something God alone can see.
2. There's a song in every silence, / seeking word and melody; / there's a dawn in every darkness / bringing hope to you and me. / From the past will come the future; / what it holds, a mystery, / unrevealed until its season, / something God alone can see.
3. In our end is our beginning; / in our time, infinity; / in our doubt there is believing; / in our life, eternity; / In our death, a resurrection; / at the last, a victory, / unrevealed until its season, / something God alone can see.

21-481「救いの主イエスの」**Giesu sommo conforto****English translation**

1. Jesus, refuge of the weary, / Blest Redeemer, whom we love, / Fountain in life's desert dreary, / Savior from the world above: / Often have Your eyes, offended, / Gazed upon the sinner's fall; / Yet upon the cross extended, / You have borne the pain of all.
2. Do we pass that cross unheeding, / Breathing no repentant vow, / Though we see You wounded, bleeding, / See Your thorn-encircled brow? / Yet Your sinless death has brought us / Life eternal, peace, and rest; / Only what Your grace hath taught us / Calms the sinner's deep distress.
3. Jesus, may our hearts be burning / With more fervent love for You; / May our eyes be ever turning / To behold Your cross anew / Till in glory, parted never / From the blessed Savior's side, / Graven in our hearts forever, / Dwell the cross, the Crucified.